

人力検索

かきつばた杯

テーマ：
食事とアンドロイド

Vol.3

まえがき

この本をお手に取っていただき、ありがとうございます。

この本は、[株式会社はてな](#)が運営するQ&Aサイト「[人力検索はてな](#)」内で行われたショート・ストーリーのコンテスト「[人力検索かきつばた杯](#)」を各回ごとにまとめたものです。

コンテストは各回ごとに出题者が決めた、時には難解な、時にはややこしいテーマに従って2000文字程度のショート・ストーリーを投稿するもので、いかにテーマを活かすか、またはいかに出题者の裏をかくか、いわば出题者と投稿者の知恵比べです。

ですから、この本をもっと楽しむために、まず「自分だったらこういうお話にするかなー」と考えてみることをお勧めします。実際に手を動かして書いてみると、もっといいかもしれません。もしあなたが文章を書くことに興味を持ったなら、巻末の解説文もぜひ読んでみてください。そう、かきつばた杯は誰にでも開かれているのです。もちろん、あなたにも。

<Data>

テーマ：食事とアンドロイド

出題者：kuro-yo

募集期間：2010/11/2～11/7

URL：<http://q.hatena.ne.jp/1288706344>

※各投稿者のコメントや出題者の講評、投稿内容の後日談などが「人力検索はてな」のページには載っております。よろしければ、あわせてアクセスしてみてください。

<注意事項>

1. この本は電子ブックリーダーやスマートフォンでの読書を前提に、少し大きめの活字で作成しております。
2. この本ははてなユーザーが出题者や投稿者の許可を得て自主的に作成しているものであり、「株式会社はてな」による公式なものではありません。
3. 投稿者の許可が得られていない作品については、許可が得られた時点で掲載します。また、既にはてなを退会されており連絡が取れない方の作品については、省略させていただきます。

第3回 人力検索かきつばた杯テーマ

「食事とアンドロイド」

あなたなら、どんなストーリーを創りますか？

目次

1. 仁は遊園地に行って、安藤と出会って、仲良くなった。 by taddy_frog (未許可につき未掲載)
2. アンドロイドに食事は必要なのか。 by rihan (未許可につき未掲載)
3. 食事とアンドロイド by alpinix
4. 僕が小学生の頃の話です。 by yossiy7 (未許可につき未掲載)
5. CASE::202509A (厳秘) by hokuraku
6. ブルルルルル... by misati-ko (未許可につき未掲載)
7. アイポの誕生日 by sokyō
8. ねえ、お兄ちゃん。 by grankoyama ☆

- ☆印は出題者が選んだその回の優秀者です。
- 作品にタイトルがつけられていない場合、最初の文をタイトルとしてあります。

彼女の名前はアンドロイド・イブ。

通称はアンディー、そう、いわゆるアンドロイド=人造人間だ。

彼女の一日は早い。朝は体内に埋め込まれた原子時計が5時を刻んだ瞬間に起きる。ただし、寝ている状態といってもエネルギーを消費しないように機能停止しているだけで、人間の「起きる」とは厳密には異なる。

ただし造物主の趣味もあってベッドで布団にくるまり、横にはなっている。

アンディーは服を着替える必要はないが、一応身だしなみを衛星撮影でチェックし、伸びることのない栗毛を右側頭部やや後方でワイヤーで括る。

造物主はアンディーにより人間に近い生活を要求した。

アンディーは朝ごはんに目玉焼きをつくり、ご飯を炊く。和食に合うのは食後の珈琲だからと、造物主に言われてからは毎朝ドリップを使って2杯分を淹れることにしている。

食後は食事の後片付けをした後、昼まで造物主の犬の散歩に出かけ、帰宅時に昼食と夕食用の食材を持ち帰る。造物主は一日三食の社会で育ったため、アンディーもその習いを踏襲している。

食卓に並べる二組の器。

気さくな造物主はアンディーにも定席を作り、食卓時には自分の向かいに座るよう教えた。アンディーはその教えを忠実に守っている。今日もいつも通り、造物主の向かいに腰掛けた。造物主の席は窓を背にしているので昼食時はアンディーは集光装置、人間でいうところの"眼"の絞り値を数メモリ上げる必要がある。

そういうときはカーテンを閉めろ、と造物主は口煩く言っていたが、アンディーはそういう手間がかかる行為の意味が理解できず、造物主が口を出さなくなったらカーテンを開け閉めしなくなってしまう。

そんなアンディーにとっては食事自体が最も効率の悪い行為になるのだが、彼女はそれを辞めようとはしなかった。彼女のエネルギー源は体内に内臓している小さい部位だけで、数百年は持つものな上、造物主に擬似睡眠の習慣を言い付けられてからは、一日の起動時間が2/3になっているので更に長く駆動可能だからだ。当然口腔に当たる器官は見た目上はギミックとしてついているが体内部分には繋がっていない。

それでもアンディーは今日も夕食の準備をする。

きっちり造物主と二人分。

食卓に並べた後、両手を揃え彼女はいつも口ずさむ。

「いただきます」

その言葉の意味をよく知らない彼女は、軽くお辞儀をした後、続けて、

「ごちそうさま」

とも口にする。

そして席から立ち上がると、二人分の食器の片付けを始める。

この夕食で百十五万九千四百四十回目の片付けを。

私はリック・サザンフォードA。行動心理学者だ。

私たちにとって、そして私個人にとっても、この学問は非常に重要だ。

なぜなら、私たちは目に見えることからしか、人の心を推し量ることはできないのだから。

あの日、私は同僚のメイリン・ランド博士とチャイナ・レストランにランチに来ていた。

「ごめん、今日は私に選ばせて」

何を頼むのかあらかじめ決めていたのか、彼女はメニューを見ててきぱきと注文していく。その音楽的な声に心を奪われながら私は尋ねた。

「あれから足の調子はどうですか？」

「不便でしょうがないわ。あなたと違ってすぐに取替え、ってわけにもいかないからね。あー、私も変えちゃおっかなあ」

「え、そんな、そ、それだけのことで、ですか!？」

「冗談よ、すぐ本気にするんだから」

そう言うと彼女はちょっと肩をすくめた。こういった仕草が、いちいち魅力的で癪に障る。

「私も懐と相談しないことにはすぐに取替えというわけにもいきませんがね。その点、貴女のほうがお金もかからなくてよいかもかもしれませんよ。」

こんなくだらないジョークにも、彼女は笑ってくれる。

奇妙に思うかもしれない。しかし、そう、私は彼女に恋をしていた。

やがて次々と料理が運ばれてきた。

テーブルに並ぶ紅焼猪脚、鳳爪飯、金華火腿のスープ…。こういった、ちょっと変わった料理にもだいたい慣れた。消化器系のバージョン・アップは安月給には少し痛かったけれども、こうして彼女と同じ時間を過ごせるのであれば高い買い物ではない。

でも。

「やあ、メイリン。あの話はどう？今度返事を聞かせてよ」

「こんにちは、メイリン。今日も綺麗だね」

「メイリンさん、この前は楽しかったね。また遊びに行こうよ！」

通りすぎる何人もの男たちが、彼女に声をかけていく。そして彼女はその度に、笑顔をふりまいている。

私には彼女が分からない。彼女の心が、分からない。でも、しかし。

胸の辺りでなにかが、きしむ音がする。

かぶりをふって無限ループをkillすると、ふと思い当たったことを聞いてみた。

「今日の料理ですが、なにかお考えがあつてのことですか？その、なんというか気のせいかな…。」

」

「あ、気づいた？これよ、これ」

そう言って彼女はギブスをまいた足をぽんっと軽くたたいた。

「ほら、怪我とか病気とかしているときは、悪いところと同じものを食べるといっていうじゃない？あれよあれ。」

「だから、足の料理、ですか。」

「そうそう、意外と昔からの言い伝えも馬鹿にならないんだよ？」

胸の辺りでなにかが、音を立てた気がした。

私はリック・ランフォードA。行動心理学者だ。

私は人の心が知りたい。ただ、知りたかっただけなんだ。

私が知りたかったその人は、もういない。

《了》

...アシモフ先生、ごめんなさい。

アイポの誕生日 by sokyō

今日はアイポの誕生日。アイポの背中から伸びたUSBケーブルを、パパのMacにつないだ。ちゃんと動くだろうか。僕は息を止めて祈った。パパも息を止めてた。動け。

少しの間があって、iTunesがちゃんと立ち上がった。僕のアイポが1週間ぶりに息を吹き返した。やったあ。アイポの頭をなでた。体温がある！すごい！

そもそもは1週間前にさかのぼる。僕のズボンのポケット入ってたアイポを、ママが洗濯機で洗っちゃったのだ。アイポっていうのは僕のiPodの名前だ。でもって当然アイポはびしょぬれ。僕はあわてて電源を付けようとして、パパに手をはたかれた。

「アンドロイドを洗濯したら1週間お休みだろ、常識的に考えて」
...というわけで、僕は灰色の1週間を過ごしていたというわけだ。

「久しぶり。お誕生日おめでとう。元気？」

僕はアイポに声をかけた。...っていっても、あいつスピーカーも画面もないから、イヤホンつけないと返事が聞けないんだけど。Macの画面に向かっていたパパが代わりに答えた。

「ん？ どうやら排出系がおかしいみたいだ。もう食べ物で充電をするのはできないから、USB給電一本でいくんだらうな」

え？

「お前のiPod、食べ物充電とUSB充電と、2つできるだろ？ USBのほうを使えば大丈夫だ」

「え。食べ物で充電できるようにしてよ」

「しかしなあ、中 浸水してるかもしれないし、だいたいiPodって開かないだろ？ 直せるようなもんじゃねえよ。AppleだってiPodはたしか、Androidシリーズ含めて修理じゃなくて交換にしてるっていうし」

「いやだ。食べ物で充電できてよ。USBで充電するアイポなんて、それじゃただの音楽プレイヤーだ！」

僕はパパに殴りかかった。わかってた。でもぶった。

ディスクユーティリティでも、ノートン先生でも、僕のアイポは直せないみたいだった。

「しかたないでしょう？ もともとただの音楽プレイヤーじゃない」

ママが口をはさんだ。

「まあ、排出ができないだけってことから考えるに、あと1回、食べるだけならできるってことだらうな」

パパが言った。そうだ。ピンときた。今日は僕のアイポの誕生日だった。誕生日には好きなレストランに連れて行ってもらえるのが僕の家ルールだ。

「ねえパパ、ママ、今日は好きなお店に連れて行ってくれるんでしょう？ 回転寿司がいい！」

「お寿司...。それがiPodの中にとどまるわけよねえ...」

ママはあからさまに嫌な顔をした。でも味方してくれたのはパパだ。

「まあ、これで最後なんだからな。せめてうまい寿司を食おう」

かっぱ寿司は混んでいた。3名様ですか？と尋ねてきた店員にパパは首を横に振って、4人席が空くまで僕たちは待った。

「ほら、納豆巻き。あと締めサバ」

僕は席に着くなり、その2皿を取ってアイポの前に置いた。アイポが一番好きだったから。

“食べ物の容量が一杯です”

イヤホン越しにアイポは告げた。これまでにないような冷たい声だった。

「そんなことないって！食べなよ」

僕は納豆巻きを取って、アイポのクリップのところに押し付けた。ママが顔をしかめた。

“食べ物の容量が一杯です”

“食べ物の容量が一杯です”

ねえパパ。

「リセット？」

「そう。なんかを長押しするとリセットできるんでしょう？それ、やって」

パパは知っているはずだった。僕の家はこのアイポが来てから、一度もリセットなんてしてないこと。それどころか、最初に入れた曲を外したことすらないこと。だって、人の記憶をまっさらにするなんてできないじゃない。それと同じだ。

「本当にいいのか？データ消えるぞ」

「いい」

「しかも排出系のセンサーがどうリセットされるのかはわからないぞ？」

「いいから。やって」

パパはうなずいた。そして、どっかボタンを長押しした。

“リセットされました”

イヤホンの声が新しくなった。さあ食べる。

僕は納豆巻きの片方を食べた。アイポの前にひと皿置いた。アイポは、残ったほうの納豆巻きを慎重に吟味した。そして、裏面のクリップではさんだ1/3ぐらいを取り込んだ。クリップが少しもぐもぐして、動作が止まった。

食べた！

でもイヤホンから、また聞き飽きた声が響く。

“食べ物の容量が一杯です”

うるさい。僕は締めサバの半分を食べた。

“食べ物の容量が一杯です”

もう食べないのだろうか。僕はマグロを取って半分食べた。

“食べ物の容量が一杯です”

僕はパフェを取った。

“食べ物の容量が一杯です”

「食べるならちゃんとぜんぶ食べなさい」

ママは言った。でも、残りはアイポのぶんだ。

僕は、流れてくるお皿をぜんぶ取った。レーンを手でふさいだらお皿がどんだだれてきた。

僕はそれを片っ端から半分だけ食べた。それでもアイポは動かなかった。

「落ち着け。あと、醤油つけて食べたほうがうまいぞ」

パパは言った。でも、そんなのよりずっとしょっぱい味がした。

「ねえ、お兄ちゃん。なに食べているの？」

妹が僕に尋ねてきた。

「これはハンバーガーだよ。前に説明しただろ？」

パンとひき肉でできてるんだけどね。」

そう答えながらも、内心僕はドキドキしている。

実はこの手の質問は苦手なのである。

どう苦手であるのかといわれれば、その先の問答が難しくなっていってしまう可能性に対してついつい心配してしまうことが大きな原因だと思っている。

妹を好奇心旺盛な性格にしてしまったのは完全に僕のせいだし、妹の前で安易に食事を取ってしまうのも改めないといけないと思いつつもついついやってしまう。妹とはほとんどの時間一緒に過ごすし、腹が減ってはしょうがない。

その結果、似たような質問をたびたび受けてそのたびに適当にお茶を濁しつつ、話を逸らしてフェードアウトするのが何度もあったのだ。

「私も一回食べて見たいんだけど」

顔を僕の鼻先まで近づけ、上目遣いで懇願する妹の愛くるしい仕草を見て僕の心が揺らぐ。食べさせてやれるものなら、美味しい物をいくらでも食べさせてやりたいと常々思っている。実行に移せないのは物理的な要因なのだ。時間が無くなってハンバーガーや牛丼などのジャンクフードを食べることが多い僕だが、本気を出せば高級レストランのコース料理二人分ぐらい毎日食べたってなんら問題ないぐらいの稼ぎがあるんだから。

「う〜ん。食べてもいいんだけどね。これはちょっと女の子には向いてないっていうかなんていうか、、、」

前にも使ったけど男女間での性質の違いで逃げ切ろうと試みる。

「向いてなくても、食べちゃだめってわけじゃないんでしょ？」

そう言われるとなかなか切り返すのが難しい。早くも最終手段に訴えることにしよう。僕は残っていたハンバーガーをすばやく口に入れ租借する。ついでに残っていた炭酸飲料も全部飲み干した。もちろん氷もガリガリと噛み砕く。

「あ～～！！また全部ひとりで食べちゃって。けちんぼ～～」

そうは言われても妹には飲食機能を組み込む前に、追加したい機能が幾らでもある。

高度抽象的推論機能もバージョンアップさせたいし、触感フィードバック機能だってごく初歩的なものしかまだ装備させてやっていない。

しかたなく僕は妹のシステムをダウンさせ、一人孤独に仕事に励むことにする。

が、ちょっと気が向いたのでアンドロイドカスタマイズセンターのカタログで、飲食関係の機能について眺めて見ることにした。

小腹がすいたので非常食のポテトチップスを齧りながら、数ある関連機能を物色する。

飲食機能も低レベルのものであれば、比較的安価だから、付けてやれないこともない。でも、味を理解できるような高機能なオプションをつけるとなると、とっても高価でおいそれと購入するわけにはいかないのだ。

やっぱり物が食べれても味がわからないなんて、悲しい状況に妹をさらすのは気が引けた。低レベルの飲食機能でも空腹感だけは感じてしまうんだからなおたちが悪い。アンドロイドの足元を見た販売戦略だどつくづく感じてしまう。

などといろいろ考えながら、僕は味のしないポテトチップの最後のひと欠片を口にほおり込んだ。

この本を手にとられて、「人力検索かきつばた杯」に参加してみたいと思ったあなたのために、参加方法を簡単に解説しておきます。

参加には以下のステップが必要です。順を追って、説明いたします。

1. 「はてな」へのユーザー登録
2. 「人力検索はてな」内で開催されているかきつばた杯への投稿or「人力検索はてな」内でのかきつばた杯の開催

1. 「はてな」へのユーザー登録

「人力検索かきつばた杯」は複合サービスサイト「はてな」の中で行われているので、まずは「はてな」へのユーザー登録が必要です。「はてな」へのユーザー登録にはメールアドレスが必要ですが、有料オプション（※）を使用しない限り費用は発生しません。なお、「はてな」へのユーザー登録を行うとQ&Aサイトである「人力検索はてな」以外にも「はてな」内のブログ（はてなダイアリー）やオンラインフォトストレージ（はてなフォトライフ）などのサービスが利用できるようになります。

（※）有料オプションには、例えばブログ内で広告を出さないようにしたり、ストレージの容量を上げたりするもののほか、人力検索でポイントつき質問をするものなどがあります。

「はてな」へのユーザー登録は「はてな」のトップページからできます。

2-A. かきつばた杯へ投稿する（費用負担なし・初心者向き）

無事ユーザー登録を終えたら、「人力検索はてな」でかきつばた杯が開催されているか調べてみましょう。トップページ最上部の検索窓に「かきつばた杯」と入力して検索をかけると過去のものも含めた一覧が出てきます。最も上にあるのが最新のものですので、開催中のページ（Q&Aサイトですので、「質問ページ」と呼ばれます）を開いてみましょう。ここではサンプルとして

第1回の質問ページのスクリーンショットを掲載します。

hokuraku
110 105 もっと見る

ポイントあり 219 pt ベストアンサーあり
芸術・文化・歴史 ネタ・ジョーク

【人力検索かきつばた杯】

テーマ:透明感のある文章

創作文章(ショート・ストーリー)を募集します。
ルールははてなキーワード【人力検索かきつばた杯】を参照してください。

締切は10月6日(水)朝6時、締切後に一斉オープンします。

★★★★

規約違反として通知

(広告スペースのためモザイク処理しておきます)

回答の条件
✓1人1回まで ✓13歳以上

登録:2010/10/01 06:59:34
終了:2010/10/07 05:26:48

ログイン状態で質問ページにアクセスした際に、まだ投稿を受け付けている場合は、この画像の下にある広告スペースと灰色の部分との間に「回答する」というオレンジ色のボタンが出ています。(画像のものはもう終了した回なのでボタンがありません)

投稿は回答用のテキストボックスに記入し、「この内容で確認する」というボタンを押せば(内容確認を経て)投稿できます。長い文章なので、あらかじめ別のファイルに書いておいてコピーするほうが安全ですよ。また、慣れてくればテキストの文字サイズや色を変えたり画像を入れたりすることも可能ですので、ぜひトライしてみてください。

え？投稿を受け付けているものがない？そんなときは、あなたがテーマを決めてかきつばた杯を開催することも可能です。

2-B. かきつばた杯を開催する(費用負担あり・上級者向き)

「人力検索はてな」は最近リニューアルして費用負担なしに質問をすることができるようになりましたが、「人力検索かきつばた杯」では以前からの慣習もあり、テーマを決めた主催者から投稿者に対して「はてなポイント」（はてな内で使える仮想通貨のようなもの）を送ることにしています。（つまり、あなたが投稿者なら出題者からポイントをもらえる、ということです）送るポイント数には決まりがありませんが、投稿者一人当たり大体20～30ポイント（20～30円相当）くらいが多いようです（ポイントは購入するか、ポイントつき質問に答えて貯めましょう。なお、ポイントつき質問の最低必要ポイント数は100ポイントです）。

質問文自体はテーマ以外が定型文ですので、既にあるものをコピーさせてもらいましょう。もしあなたが人力検索で初めて質問をする場合、質問文中に「初めての質問ですので至らないところがあったら申し訳ありません。」とでも書いておけば、親切な皆さんが色々と教えてくれるでしょう。あらかじめ過去の質問（開催状況）に目を通しておくと雰囲気がかめると思います。

人力検索かきつばた杯 ～食事とアンドロイド～

<http://p.booklog.jp/book/42217>

著者 : hokuraku

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hokuraku/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42217>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42217>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.